

可認物快郵種三等省信費日六十二月二十年一十三治明
 行發(日五十、日一)回二月每、號六十六第
 元 日一月一十年四十三治明

社 説
 大學制度改善論

論 説
 慈善事業の設置に關して

藤岡、眞岡兩君を送る

眞岡湛海君を送る

安達 愚佛

文學士有馬 祐政

曉 鳥 敏



號六十六第

雜 録
 米國より

信 界

和合の心

社 會

(在米)文學士秦 敏 之

文學士清 澤 滿 之

久我會頭東北巡回日誌
 眞宗大學移轉開校式
 眞岡總務員の送別會
 紛々録

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

○政教時報第六十五號目次

社説 所謂空言………(在英 伊東思善)

論説 緻密なる感化院の法律制定を望む………(本多文士)

雜誌 南信の風物………(永井澤江)

信 爲さざる也、能はざるに非るあり………(眞岡文學士)

社會 ●久我會頭東北巡回日誌等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす

一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の郵は五厘切手にて一割増の事

一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字語)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年十月三十一日印刷
明治三十四年十一月一日發行

發行兼編輯人 井目木智雄
印刷人 濱本朝太郎

政教時報

大學制度改善論

明治十九年大學令の發布に成た頃は、今日の如く、三大學も四大學も設立の必要があるといふ考は無たらしい、從て今日になりて見ると大學令に不都合を感ずるの點が頗る多い、本會總務員醫學博士片山國嘉氏は、之に付て改善の計劃を立て、國家醫學會雜誌第七十三號の別冊として評論せられた、是は固より博士一人の考案で有るけれども、本會は亦此説には大に賛成するものである、殊に法、文科大學の改善策中に教科大學若くは教學科を新設するのは本會は久しく持論とする所であるから、茲に同博士の改善論の總論にかゝる部分と、教學科にかゝる所論とを紹介して、江湖の識者の贊同を請ふ世の中とは何事でも完全無缺といふとは難い、法律規則の如きも作る時には完全無缺と思ふたものも實行して見ると後だから種々の缺點を見出したり意外の不結果を生ずるとの間々あるは世人の普く認むる所である、

(1)今の大學制度十五年間の實驗

今の大學令も明治十九年に愈々之を發布せんと決したる時には申分無く上出來のものと思はれたればこそ實行せられたるに相違ないと思はるゝが、さて其後十五年間の實驗に徴して見るとドウも豫想に反したる點があるやうだ、他の學科は暫く措き醫育機關は儘に種々の關係に於て大にその活動力を減

殺せられて居る、恐くは醫科許りでなく他科にも同感の人が多々あるだらうと思ふ、乃で私の觀察に違なくば善は急げだ一日も早く此大學制度を改正して成るべく完全無缺に近いものになさねばならぬ、その時節は既に到來致して居る、若し今後も永く此儘に格て置いたならば膨脹的日本國民の志望趨勢と相衝突して將來に一大恐慌を招くの患ひかありはせぬかと私は甚だ懸念する、

(2)今の大學制度の三不都合

今の大學制度には少くとも左の三の不都合があるやうに思はる、

- (一)今の大學制度は國家經濟の大原則たる需要供給の道理によく調和することが六ヶ敷い、
 - (二)評議會の組織は各分科大學相互の活動力を減殺する、
 - (三)今の大學令に準じて國家に須要なる丈の新大學を増設するとは恐らく國家經濟の許さぬ所である、
- 先づ少くとも今の大學制度には此の三の不都合があるやうに思はれます、
- (3)三不都合の一、
- (一)の理由を少し詳しく申せば大學令に帝國大學は大學院及分科大學を以て構成す(第二條)、分科大學は法科、醫科、工科、文科、理科、農科とす(第九條)、とありて一の新大學を設立すれば其處には早晚必ず此六分科大學を聯立せねばならぬやうに多くの人は解釋するやうである、又實際其通である

等はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古 双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論

とは京都大學が好例である、京都大學は最初に理工科大學を設け次に醫科及法科大學を設けその設備未だ完成せざるに新聞紙の傳ふる所に依れば不日又文科大學設置の爲めに巨費を要求せられんとすといふ、斯う云ふ場合に處々の分科大學の聯立するは理想として寔に結構で私も國庫の經濟が許すならばドウか斯くあらんとを望む一人であります、然し社會及國家の須要として要求する學科の種類やその員數や又此要求に應せんどの志望者の多寡等は各科決して平等一様でない、實際は甚だ不平等である然るに此の緩急要否に拘はらず、一大學には必ず六分科大學を設けんとするの規定はドウも國家經濟の大原則たる需要供給の眞理と調和を缺て居るやうである故に之を今の大學令の不都合なる理由の一つとします、

(4) 三不都合の二、

(二)の理由を申せば帝國大學に評議會設置(第六七八條)の精神は無無論良からぬ筈は無く、必ず良かつたに相違はないが、ソコが六ヶ敷い所で實際の經驗によれば、ドウも評議會の組織は豫想通りの好結果を得ない、然らば評議會はあつたがよいか無いがよいかと云へば、先づ無い方が不知不識の間に各科相互に活動力を減殺するやうなものがなくてよいと思はるゝ、これが不都合の二であります、

(5) 三不都合の三、

(三)の理由は今の大學令の命するが如き六分科大學の完全に聯立せる大學を數多く設けるとは到底目下日本の國家經濟の許さぬ所だらうと思ふ、理科の農科は未だ醫科や工科の如く

既設大學の擴張や又は新大學増設を焦眉の急とせざるは高等學校各部志望者多寡の情況及需要の夥多なる情況等の點より推考すれば何人にもその判断は容易である、然るに一二の分科大學が世間の必要に迫られて増設せらるゝ時は左程急用の無き分科大學も亦之に伴ふて増設せなければならぬといふ様にして無暗にその費額を大にせば此が爲め反て必要なる分科大學の擴張、増設、若くは既設大學の完備を妨ぐるの患があるこれが不都合の三であります、

(6) 大學制度改善の急務及考案、

斯の如く今の大學令に依ると種々の不都合がありますからこれはドウでも氣の付た以上は一日も早く改正して完全にし、缺點のない大學制度に改めなくてはならぬ、これは目下の最大急務であらうと思ふ、然らば今後之をドウすればよいか之に就て私の考案は凡そ左の通りであります、

(7) 各異質分科大學の獨立、

第一、國家經濟の大原則たる需要供給の調和を容易ならしむる爲め、今の大學の如く各地に全くその性質を異にせる六分科聯立の一大學を置くの制を改めて、帝國大學は全國を通じて一個とし、其分科大學は適宜各地に散在せしめ且其各分科大學を殆んど全く分離獨立せしめ國家の須要に應じその數を一二にし或は五六にすることをす、

(8) 各同質分科大學の聯結、

第二、分離獨立したる各地の分科大學中同質の各分科を聯結して之を帝國分科大學と稱する一の團體とする、

第三、各異質の分科大學は前述の如く互に殆ど全く分離獨立の姿とすると相互の利益なるを以て無論之を必要とすと雖も各分科大學の發達利益上相互の妨害とならざる限りに於ては異質分科大學間の聯絡を通じ成るべく相互の利益を謀り且その權衡調和をよく保つての工夫も亦肝要である、乃で大學院を其上に置いて之を各分科大學共通の處となし、宮殿を御一名を總裁に奉戴し時の文部大臣副總裁となりてこれを補佐することとし常には主として學位の事を司り其學位記には總裁の宮殿下の御名を署して之に一層の光榮を添加するものとす、若し幸に此の如くすると得ば一方には各分科大學を分離獨立してその發達改善に大自由を興ふると同時に他の一方に於ては各分科大學相互の妨げとならざる限りに於て高く且緩く大學院を以て之を一處に結合して其間の調和を保つことを得るのみならず又上は高く、帝室に近接するを得て一舉兩得至極の妙策ならんと信する、故に私は何卒此事の實行に至らんとを切望します、

(11) 各分科大學の經濟、

第四、經濟の點は次の方法に依るとせば妙ならんと思ふ
(一) 總長、學長、教授、助教及諸廳員の身分、待遇及その俸給並に應費等は差當り是迄通りの國庫の支辨とす、
(二) 教室費、病院費、圖書館費等は總べて財團の方法に依ることとする、
乃で此財團の基本金は素より急速には、出來ないが凡

(10) 大學院及總裁の宮

例之帝國法科大學、帝國理科大學と云ふの類である、而して是迄の如く東京大學の總長、京都大學の總長といふを廢して法科大學の總長、理科大學の總長といふが如く各分科大學に總長を置き此總長は同質の各分科大學は勿論其他同學科の教育機關全體を統轄總理することとする、例之醫科大學總長は各醫科大學は勿論其他又各種の醫學及藥學教育機關の全體を統轄總理するものと致すのであります、然し京都大學の例に従ひ理科と工科を合せて一分科大學と爲し或は之を合せざるも理、工の二分科又は理、工、農の三分科大學に一の總長を置くを便宜とすればそうしてもよい法、文、の二分科大學も亦一總長でよいかも知れぬ、さうすれば各分科に總長一人づゝ都合六人を要する處帝國大學の全體に於て總長の數は僅に三人か乃至四人で済むととなる、

(9) 學科の統一
斯するに誠によく日本全國に於ける各學科各自の統一が出来る、法學なり醫學なり其教育法に統一なきは後進の不幸のみならず又國家の不幸である、今此の如くにすれば自然と統一の道も立ち今日の不統一の悲境を脱して是より次第に學科統一の順境に移り行くの端緒とすに開くるが故によき法官、よき辯護士、よき醫師、よき工學者、よき農學者何れでもかも皆よき學問をした學士が多く揃て出来るから國家の爲めこんな結構などはない、こうすれば實に國家の爲め大利益となるのであります、

善はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古 双方共に重傷を負ふたことを書いておつたが、原目と多言

その財源として徐々に進行させる考である。
 (2) 各分科大學の經常費、
 先づ各分科大學經常の費用は左の五種の財源より得る積りであります。
 (イ) 基本金の利子、
 (ロ) 國庫より年々の補助、
 (ハ) 地方費より年々の補助、
 (ニ) 諸收入、
 (ホ) 有志者及有志團體の寄附。

(中略)

(1) 教科大學若くは教學科の新設

因に文科大學の學科に就いて一言して見たいとがある、夫は外でもない獨乙邊の大學には大抵其首位に先づ神學科大學といふがある、これは其國民の多數が信奉する所の宗教學科を教授する所である日本には未だ日本國民の大多數が信奉する所の宗教學科を教授する特種の教科大學がない、特種なる教科大學は置なくとも文科大學を教文科大學と改めて其中で文學科と教學科とを對立せしめてはドウだらう、又夫もならずば文科大學に今九學科あるのを十學科として、千有餘年來吾々の祖先が信奉し來り又現時に於ても同胞四千餘萬人中の恐らく九十九「プロセント」が信奉して居る所の宗教は兎に角現時許りでなく又必ず未來の日本國民の宗教故、その教學科を置て未來に於ける日本の宗教をよく薰陶するやうにしてはドウだらう、私はこれを國家

の須要なる一問題であると思ふ、今日迄此事の無つたのが恐らく間違であつて今後は是非其之を置くのが至當だらうと思ふ、國民の大多數は否でも應でも此の祖先傳來の關係を全く離るゝとの殆ど出来ないものであるといふことが世界一般の實相であつて見れば尙も未來の宗教家たらんと欲するものには必ず完全なる高等普通教育と、その宗教學科の高等(大學)教育とを授けて今日以後の時勢に適合し得る學識あるものとすべきの必要がある、うしななければ到底今の日本の民間に於ける宗教的弊害や有害なる迷信的行為を一掃して高尚優美なる日本國民の宗教の真相を發揮するとは到底出来ぬとである、偏狹なる科學者は一も二もなく兎角に宗教を輕視し、淺見なる宗教家は又科學を蔑視するの傾向ありと雖もこれは孰れも謬見である、虚心平氣でよく沈思せられよ、兩科の研究が愈々進むに従つて兩者は互に段々と接近するの徴があるではないか、兩者の間に天地の懸隔あるやうに見へるのは只今の見地の遠ふからのとだ、兎に角心を廣く持て國家の須要如何と考へて見ねばなりませぬ、偏狹にして窮屈なる考をする、思はず識らず大學設立の本旨に反するやうな大間違が起るから世人はよく、虚心で考究して見ねばならぬと思ふ、

博士の説は之を廿八節に分ちて詳論してある、今は唯一部を鈔録したのであるから、逆も全豹は分らぬが、併其一斑は知り得るであらう、殊に他の點は、現今の大學制度の儘で存するにしても、教學科の新設だけは何處々々までも主張せね

ばならぬ、現今でも己に印度哲學の名稱の下に村上博士 前田講師は佛敎を講せられ、中世倫理學史といふ名目で、中島博士は耶蘇敎を講せられ、言語學講生擔任の高楠博士も亦印度古代宗教の事を講せらるゝといふことであるから、今新に教學科を新設しても實質には莫大の相違は無くして、學科の統一を得る利益があり、又學科の不備を補ひて大學を完全にすることが出来る、何れの點から論じて見ても、此學科を新設することは利ありて害が無い、我々はドーシテも此事は主張せねばならぬ、

論 說

慈善事業の設置に關して

安達 愚佛

近來社會の必要に迫られて慈善救濟事業なる育兒院孤兒院感化院救貧院其他種々の事業の各府縣に興起せるもの明治三十年來各新聞雜誌にて之を知り又は實見したるものを數ふるに全國に一百有餘の多きに達したり尙予輩が未知のものも定めて多かるべければ其數頗る多數ならん而して是等のものを發起し盡力する人の種類を観察するに公共的に起るものを除きては第一に宗教家第二に地方有志者第三に慈善的詐僞師の三者に屬するが如し爰に聊か愚衷を述べて參考に供せんと欲する所以のものは宗教家及び地方有志者の設置する所のもの

が完全に發達して國家社會の裨益となりん事を冀望すればなり
 特に宗教家の設立するもの、中に就き耶蘇敎家の手に屬するものは熱心至誠なる己人の發起に係るもの多く隨て其機關も一己人の頭腦に依りて運轉し其補助者は唯之を補助するに止るの任組なれば其成績も比較的完全に其運動も頗る敏捷なるが如し之に反し佛敎家及地方有志者の組織に係るものは多くは其立の性質を帶るより其頭腦たる中心の勢力は實際業務の局に當るべき人にあらずして局外の有志有力者にあるが爲に其成績も不定全に運動も亦敏活を欠き稱もすれば不振の境に彷徨するもの多きが如し中には所謂囃頭多くして山に乗上るの嫌ひあるものなきに非ず是聊か愚衷を述べんと欲する所以なり

元來慈善事業なるものは營利的の會社銀行又は行政的事務を處辨するが如きものとは全く其性質を異にし生命ある可憐の人に對して慈悲的行爲を實行するものなれば規則や道理を以て良効を奏し得べきものにあらず特に貧兒孤兒の教育慈善少年の感化窮民の救濟の如き事柄は其當局者たるものが常に事業の中心頭腦となり溢るゝが如き熱誠を以て自由勝手に百事を運轉する方法を採るにあらざれば到底其奏効は見るべからず左れば之を創設し之を贊助し之を助長する所の人々は如何に多數にもせよ又其人々は如何なる有志有力者にもせよ尙くも局外者たらんものは必らず熱心立誠なる當局者に一任して毫も其處置に容喙し干渉するが如き舉動あるべからざる事

等はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論手

を覺悟せざるべからざるなり
 然るに現今設立せられし慈善事業及び將に設立せられんとしつゝある所のものを見渡すに宗教家に屬する者も地方有志に屬するものも其役員たるものは多くは其社會の名望家又は有力者を以て之に充て評議員とか理事とか又は委員とか協議員とか云ふ如き名譽の役名を付し其上に總裁とか會長とか唱ふる名譽員を戴くのは殆んど千遍一律の如し而して是等名譽ある職員が實際の局に當りて其困難なる事業に任ずるかど云ふに決して然らず其下には有給の役員を置きて以て實際の業務に當らしむるものなり爰に於てか多數名譽の役員中には一人又は數人熱心なる人物ありて種々の希望様々なる意見議論を抱き居るが故に當局者に向て種々の干渉を試み様々の希望を局外より持込むものにて首尾貫徹せる當局者の意見と希望は常に往來する處ならずし當局者は右等名譽の有志有力者の干渉容喙に向ては反抗するは素より一言とでもある可らず若し是等の人の意志に隨はずんば此事業は成立する能はざればなり左れば當局者は常に局外者の意見議論に依て制射せられ左右せられ殆んど木偶人の傀儡師に使用せらるゝが如き状態に陥り易きものとす是則ち其立的事业に伴隨し來る所の普通の弊害なるが如し營利事業又は行政的事務の如きは其責任の歸する所重きが故に特志的又は深切的の意見議論は矢鱈に云ふものもなく受るものもなきは自然の情勢なれども慈善事業は之と異りて其根本が慈善なるを以て特志的深切的の意見議論を持出すものも持出し易く受くるものも御無理御尤と

して受けざるべからざるの情實に陥る者にてつまる所は其事業をして不結果に歸せしむるの外何の効能もなきもの、如し斯の如く云へばとて事業を創設し贊助する所の有志有力なる名譽の役員に毫も此事業の全部に容喙すべからずと云ふにはあらず局外なる名譽の役員が容喙すべき事干渉すべき事は豫め整然區畫し其境域を越へて立入るべからざる事は恰も政治に立法行政の區域を定め互に相侵さざるが如く爲さるべからざるなり其區畫とは何ぞや其概要を云はば例へば一年度の豫算の議定の如き或は其事業に取りては異例の事件の如き宜しく名譽役員の審議を要すべきものとし其豫算以内に屬する收支の如き事は云ふも更なり其内部の事業に關する百般の事柄は宜しく當局者に一任して該事業の目的を誤らざるや否やを局外に在りて監視せば充分なりとせざるべからず次に當局者を優遇し且其意見と希望を充分に實行せしむるが爲に他の有志有力なる名譽職員が之を補助翼賛すべき事はなり今の多くの慈善事業の實際の状況を觀察するに斯る慈善教育の事業は其根本が慈善博愛心より興るものなるを以て其當局者も亦博愛心を以て之に當るべしとの趣意を以て俸給等は問ふ所に非ずとし一身一家に要する衣食の料にも足らざるが如き測給を以てし而も之を重視せず恰も有志有力者の驅使に任ずるが如きものあるが如し是根本的に其要件を誤るものと云はざるべからず斯の如くならば折角設立したる事業も終に能はざるなり若し斯の如くなれば折角設立したる事業も終に

萎靡振はざるのみならず恰も身体存するも精神の脱けたる痴呆の如く身體相應の活動は到底望むべからざるなり
 要する所慈善事業なるものは如何なる組織にもせよ信任せらるべき熱心至誠なる人物を得て百事を一任し之に給するに充分の俸給を以てし之を遇するに鄭重なる同情を以てし局外の有志有力者が如何なる名案なりとも如何なる希望ありとも唯參考又は注意に止め決して之を指揮命令するが如き舉動あるべからず聞く所に依れば歐米諸國の該事業の如きは縱令州立立の如き公共的のものに於ても皆此方針を取り何れも當局者に一任し終身的の業務として從事せしむるのみならず中には父子連綿三代に及ぶものなりと云ふ是即共立的慈善事業をして社會に對して有益なる奏功あらしむる所以の妙法此他に

其意志も強固にして徒らに他の驅使に任する能はざる所の人なり之を求るに其道を以てし之を遇するに其法を得ば其人を得ること易々たるのみ人なきにはあらざるなり

藤岡、眞岡兩君を送る

有馬祐政

私共の學の友、教の友なる、藤岡勝二君、眞岡湛海君は、相前後して今向東京を去らるゝことになつた。即ち藤岡君は文部省留學生として歐洲に渡航せられ、眞岡君は勸學院院長として伊勢に赴任せられるのである。既にこの兩君のために盛大なる送別會が開かれて、私も出席しました。當日の口述を止めて、ここに筆記に依り、いさゝか私か兩君に對する送別の意を表することに致しました。

私の考へますところでは、藤岡君は硯學者の方であつて、眞岡君は事業家の方でありませう。藤岡君の強記と敏慧と鋭才とは優に硯學者たるの資性であり、眞岡君の誠意と謙徳と敏腕とは確に事業家たるの素質と認めます。佛教青年會中、勿論許多の英才がありまされるけれども、この兩君はこの二方面においての雄中の最も雄なる人達とまうしたのである、今や將にこの兩君、一は學術研究のため外、異域に渡り、一は教育事業のため内、古郷に歸らんとせらるゝのは、誠に適當であつて、しかも、將來の大成について、兩君のため、教學のため、國家のために私は内心深く壯快の念に堪へぬ次

にあるべからざるなり
 該事業に關係ある有志有力の人々より較もすれば該事業に献身的に従事する人なきを苦しむとの語を聞くことなり是れ誤りの甚しきものなり慈善事業に適當の人物とて特殊なる人を得ることは或は難からん然れども普通の常識あり斯る事業に對して趣味を有し希望を抱蔵する人たらんには從令寸毫の經驗なきも適當の人と見て可なり經驗なるものは其事業に従事して始めて之を生ずべきのみ然れども斯る人は至誠なる宗教家又は熱心なる教育家の中に求めざるべからず少くも宗教の感化に浴する至誠の人物或は社會改善に志ある人教育上の希望を有するが如き人ならざるべからず右等の如き人は多くは自己の榮枯を顧みず利害を事とせざるの性質を帶ると同時に

善はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原はど多言

第でありませぬ。惟ふに、日本國民はもはや全世界を以て活動の舞臺とせねばならぬのである。實業上においては勿論、宗教上においても亦同然であるが、特に學術上においては今後當にかくの如き抱負を以て進行せねばならぬと考へる。就中、言語學においては、日本國民としての責任は非常に重大であらうと信じます。かれら西洋人は未だ十分に東洋諸國の言語をば研究してをらぬのである。風俗をさへ未だ十分に丁解してをらぬ。歴史をさへ未だ十分に承知してをらぬ。哲學もしかり、宗教も亦しかりである。言語にはさへ、通達してをる者かあつても、言語のものの性質變化起源等は容易に説明し得ぬのである。しかるに、今藤岡君は三年の間獨逸國にありて言語學の精粹を修得し、やがて歸朝の曉には必ずやそを應用して縦横わが國の言語に向つては勿論、諸他東洋の言語にも波及して、本邦をばじめ全世界の學術界に偉大なる貢獻を致さるゝことでありませう。まして、方今、言文の一致、國字、さては、國語の改良を論ずること熾んにして、實にわが國民の一大疑問となつてゐて、精細嚴密なる研鑽討究に須つものうたゞ切なるものがあるものであります。その影響するところ、豈宜わが國のみに止まらうや。蓋し甚だ廣遠であらうと思ひます。藤岡君は實にこの方面に活動し進行せんと勉めらるゝことであるから、前途頗る多望であるといはねばならぬ。うの上、言語學なるものは、未だ日本では極めて幼稚であつて、上田博士な姿をられるけれども、私共は未だ不幸にして

るの學說意見の公にせられたものを見ぬ。つまり、未だ何等の賦與貢獻をもわが國語の上、世界の語學の上に致されてをらぬようであるから、私共は幾層倍の奮發を藤岡君に希望せねばならぬ。さて、眞岡君に望むところは、全然これに異つてをる。固より宗教に關し佛敎に關する研究は收てこれを怠られてはならぬことで、梵語や波利語の研究については、幸いにも、常盤井新法主のあるあり、造詣の便甚だ多かるべしといへども、主としてわが君に須つところのものは、宗教家の養成と宗教界の廓清等にあるのであります。今事新しくいふまでもなく、現在の日本において眞正なる宗教家を得ることは非常に困難である。宗教界特に佛敎界の弊風は厭忌すべきものが至つて澤山ある。敎法においても、敎風においても、改正を要するもの、數ふるに邊なきほどである。學校についても、亦實に夥しくあるのである。帝都へ移轉せしめても、當世の學術を敎授しても、何の益をもなさずして、却つて害が随分つきまどつてくる傾向が見えるほどである。信念の確立といひ、慈悲の勤行といひ、傳道の普及といひ、いづれも形體の如何によるものではない、私は現在の佛敎界については勿論、將來の佛敎界についても、中心竊に痛憂に堪へられぬのである。これ眞に眞岡君の如き、眞摯にして熱誠なる有徳有腕の人に依頼せねばならぬ事業であります。眞岡君は恰も好し勸學院院長として清閑温雅なる土地に行きて一派布敎家の風雜を養育するの任に膺らる。時處位皆共に宜しきを得たりといはざ

るをえぬ。まして、高田派は由來眞宗の眞傳を得たりと稱せられ、その祖眞佛上人の徳化は大いに關東諸國に宣布せられたことがあつたので、その歴史は他に超々勝れてをるものがある。今はたとひ門閥少く資力乏しといふといへども、博學宏識なる法主の上に在るありて、日本佛敎界の中心たらんにあいて、動かすべからざる基礎があるといはねばならぬ。眞岡君能くこれらに鑑みて、潛思靜慮、勤行精進、以て眞正なる宗教家を輩出せしめ、圓滿なる佛敎界を顯現せられんことを私は希望して已まぬ者であります。然らば即ち君が這回の歸郷赴任や、事甚だ大任甚だ重しといふべきで、その宗教界に對する關係は、藤岡君の學術界におけるその如く、密接にして重要なりとなさざるをえませぬ。その方面については、兩君相互に異つてをられて、隨つて私の希望するところも、しかく異つてをるけれども、共に一佛敎界中の人、内にありても、外にありても、その研學において、その事業において、十分なる効果を擧げられなば、獨り私共學の友たり敎の友たる者においては勿論、博く佛敎界の榮譽といはねばならぬ乃、佛敎の振興、國家の隆盛に擧つて力あるべきことと信じてをる。終りに臨みて、偏へに兩君の心身がいやます清健ならんことを祈ります。

眞岡湛海君を送る

曉 鳥 敏

舟は新米を積んで漕ぎ、雁は天秋を鳴き來る時、勢舟眞岡

湛海君足下都門の塵を辭して、氣麗に、水清き郷里に歸らんとす。うの歸るは父母の老を養はんか爲めのみならずして、宗門子弟の英を訓ぬんか爲なりとや。足下は眞宗高田派の僧、而して宗教問題に狂奔せるか爲めに、近角常觀君と共に大學院を除名せられしを知る我等は、足下 尋常一様の僧にあらざるを知る。足下は帝國大學の文學士而して、呵々大笑底の磊落と、競々下視底の謹慎とを以て、過去二年間佛敎青年會に幹事として盡すところありしを知る我等は、又足下か他の同窓かパンの爲めに、名の爲めに身を賣るの間、獨り森川町の破屋に心を養ひしを知る我等は、足下の普通一般の文學士にあらざるを知る。足下今や、その多くの友の海外に留學するに先じて、郷に歸らんとす。而してうの歸るは、所謂高貴の職に就く爲めにあらす、榮達の道に進むにあらす。高田派本山かうの宗門子弟を教育する勸學院はその學生百に充たす、うの規模亦大ならずとや、しが、都門に在りて一騎當千の活動を爲し得べきの足下、わゝ我眞岡湛海君の、今郷に歸るは茲にその學生を訓育せんか爲めなりと云ふ。足下の友の或者は牛刀を以て鶏を割くの感を抱きぬ、或者は都門足下の敏腕を要するの多きを知りて足下の區々たる一小校に村夫子を學ぶを惜みぬ。而して足下其人は喜んで都門を去り、樂しんで小學院に隠れんとす。友人か獨逸に留學すりよりも一層の樂みと望みとを以て一派私立の學院に入らんとする足下の大覺悟は、秃筆を弄して足下を送るべく我心を惹きぬ。

管はない、かゝる人こゝりて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

迂なるかな世の人、獨逸に行かずんは學者又は思想家たる可らずと思へり。國家が大學の教授を要する時には、學生を海外に派して學ぶ所をあらしむるは、あなから悪しきことにはあらざらむ。大學教授なるもの、文學博士なるものは、右今の學者の説を知る者の位地又は稱號なりと云はんか我等は云ふ所なからむ。されど我等は思ふ、科學、歴史などの學はどまれば、哲學の如きに至りては、斷して然るべからず。一生ケニツヒルヒの地を離れざりしかント氏は哲學者にあらざりしか、右今唯一の大哲學者たるカント氏は決して外國に學びし人にあらざりしにあらざるや。足下が都内を辭するについて、思想家としての足下の進路を危む友ありと云ふ。されど、我は然か信せず。我は寧ろ、足下が田舎に入る獨逸に留學するよりも一層、思想家としての足下に望みを屬する者あるぞや。都は語る所なり、田舎は讀む所なり、都は働く所なり、田舎は考ふる所なり。田舎に於ける考察は、都の夫に勝れる、深みのあることは、足下の既に知る所ならむ。我は足下が樂んで田舎に入るは、期する所の大なる所以、當世風の淺薄者流を一步拔きたる希望の存する所以なりと信するが故に、今足下を送るは海外留學生を送るよりも幾倍の歡喜を以て送るなり。足下肯するや、否や。

哲學者フヒテ氏をして、我は、獨逸國民の再生をペスタロヂの學舎に望む」と云はしめたる、そのペスタロヂ氏はいかなる人なりしぞ。教育史家か十八世紀の光りと稱するペスタロヂ氏は大學の教授にはあらざりき。教育學上に大貢獻を

爲したりし彼は、海外に留學し來りし者にもあらざりき。ニュホツに養育院を建て、スタンツに孤兒院を設け、ブルグドルフに小學校を創め、ブルグトルフとベルドンに學舎を建て轉々この小學舎に十年を數じし、ペスタロヂ氏は大教育家なりき。「レオナルド、エンド、ゲルトフッド」の著者は田舎の村夫子なりき。眞岡君足下、人は足下が官立學校の教授たり得べきの學才能とを持ちて、一私立の學舎に赴くを惜む。されど、我は然らず。ペスタロヂ氏を知るの我は然らず。官立學校何するものぞ、文部省より許可を受くる官吏たる官立學校の教授何するものぞ。彼等は講義位を爲す一器械なり、一道具なり、焉んぞ理想の人を造り得ん。之に反して、足下の赴く所の學校は、足下の理想の教育を施すべき所なりと云ふにあらざるや。足下の喜んで都門を辭する豈偶然ならんや。思想家を以て、或は教育家を以て足下に俟つは常らずと云ふか。然り足下は僧なり、宗教家なり。宗教家を以て任する足下が、宗教家を養ふ任に當らんとするは、これ無上の快にあらざるや。親鸞上人の教は稻田に於て大成せしにあらざりしか、空海の金剛峰寺道元の永平寺は都には建てられざりき。宗教家としての足下が田舎に入るを、惜む人は、未だ足下を知らざるなり、足下を以て吹けば飛ぶ如き輕薄者流と思へるなり、足下の信念と足下の品性に對する尊敬を拂ふ我は、足下の都門を辭するを賀せずとするも得ざるなり。足下が勸學院に行くは、足下が故意に行くにあらざりして、如來の行かしめ給ふ所なり。されば、三年の後、或は五年の後、

否來年にも如來若し足下を都に召さば、足下は必らずや、都に來らむかな。我は其時の必らず來るべきを信するなり。行けや足下、足下の行く所に如來あり、我のある所に如來あり、共に如來光明中に住む身の、送ると云ふも愚か。請ふ足下翼くは我が愚痴を憐れめ。

社 會

久我會頭巡回日記(承前)

本合海 最上郡八向村大字本合海は最上川の渡船場にして、館の屋といふ旅館は此川に在り、眺望佳なり、座敷は庵末にして已に古びたれど、明治十三年聖駕東巡の際、新築して御休憩を仰ぎまつりきといふ由緒ある室なり、會頭一行は前日も此室に休憩せしが、本日(廿八日)は旅館として此處に投せり、會場は曹洞宗積雲寺にて、午後二時に至りて、開會の趣意は演せられぬ、夫より會頭始め一行三氏の演説あり、聴衆は三四百に過ぎざりしも、土地の有力家のみを集めしは、有志者の盡力なり、此日は朝二時過ぎに起き四時過ぎには已に酒田廠海樓を立、幾十の有志者に送られて、兩羽橋畔に至り、其處に袂を別ちて、ひた馳せに走らせ、午前十時には已に七里を馳せて、清川驛に着し一休の後又二里にして、本合海に着せしなり前夜の睡眠の足らざりしと、道程の稍長かりしにて、一行疲勞甚しく、夜は早く寢に就きぬ、二十日間の旅行中會頭が揮毫を休まれしは唯此一夜のみなり

廿九日 此日は別に演説の場所もなし、且山形市の杉山旅館より招待ありたるを以て、一日休憩すへしとて、朝は五時旅宿を出發、例の如く、舟形、尾花澤等にて車を換へ、九里程にして、楯岡驛に達す、時に午十二時なりき、少憩の間に上り列車楯岡を發す、之に乗じて山形市に着せるは二時遊なり、杉山旅店より主人を始め數人の出迎あり、此夜は一同休息せしも、唯會頭のみは、此夜二時迄數十枚の揮毫ありて却て平日よりも御苦勞なりき、翌三十日朝二番列車に乗じて谷地町に向ふ、

谷地町 長谷寺に於て佛教演説會を開かる、なり、天童驛にて下車し、十數の歡迎人に導かれて馳すること二里許、谷地町に入るや、道の南側は歡迎人を以て滿ざる、長谷寺に入り、先づ本堂に至りて佛前に禮拜を遂げ、後休憩す、此日當寺住職仁藤巨寛師の先師、能大本山總持寺第一世變堂禪師の進吊法要あり、一行は參拜焼香す、終て午後演説會あり、聴衆滿堂、例によりて、本多芳川二氏の演説、會頭の挨拶あり、引續いて茶話會あり、此茶話會の出席者には十一二歳の小兒もあれば、又白頭の老婆もあり、實に前後に類稀なる種々の人物を以て滿されぬ、其夜又有志者數名の懇請によりて、本多芳川二氏出席、座上本多氏は喇嘛教に關して、芳川氏は臺灣布教の實歴談をせられぬ、同地には仁藤氏の企にかゝる、谷地觀光社あり、眞宗安樂寺に設けられたる、谷地眞會支部あり、各盛なりといふ、觀光社は即雜誌「日月」を發刊す、赤湯町 十月一日早朝谷地を辭して、天童に出て上り一番

管はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古 双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

列車に乗じて赤湯町に向ふ、赤湯は幾日少しく事情ありて、開會の運びに至らざりしが、同町の有力家長張登氏は先年北島道龍師に從て盡力せし佛敎熱心家なりければ、是非一行を請せんとて盡力して、遂に此日迎へらるゝことなれり、然るに同町は、候爵累日の御疲勞を慰せんとの趣意にて、款待を盡されしも、別に演說會の催しは無かりしが、會頭は今回常縣に來りしは、決して悠々安樂を貪らんが爲にはあらざれば、是非共演說會を開かれたしと請求せしかば、俄に旅館丹泉ホテル樓上に於て、夕刻より演說會を開くことに決し、町中に使を發して傍聴を促せり、同ホテルは頗る廣大なる建築なれば、樓上は演說場として、恰適なりしを以て急の催しとして、其夜盛會なりき、同所の温泉は最身體を温むるに効ありければ、一同度々浴して靜に眠に就きぬ

福島町 前日板屋峠十九の隧道をくぐりて山形縣に入りてより越に十有七日、山形縣の都會大方は巡回して、今や此縣地を辭するに至りぬ、米澤驛に至りて、小松町以來十餘日間最幹旋の勞を取られし、山形宗務支局員近野俊親師と袂を分ちぬ、峠驛に至れば、福島有志の出迎に接しぬ、福島驛に至れば歡迎人山の如し、旅館松葉館に投ず、館は阿武隈川に枕み、八千代山に對し、風景最健、今回巡回中には酒田の瞰海樓に次ぐの眺めなり、信夫八景は樓上より一目の下に集る、扱演說會は公開堂に開かれぬ、開會は午後二時半頃なりき、夫より例の三氏の演說あり、引續いて茶話會あり、又夜の演說會あり、旅館に歸りしは夜十時頃なりき、此會最盛會にし

て、且同地尋常師範學校長は佛敎に熱心にして、男女の學生を率ゐて來聴せられしは、頗る會頭にも満足せられたり、此地には前にもいへる如く、佛敎各宗には共同して鳳鳴會を起し、育兒事業を爲し、又列に黒岩長七郎氏等の起せる節度會なるものあり、節儉力行を主義とす、人の言ふ所を聞けば當事は今夏押川方義氏出張して大舉傳道の運動をなし、が、立派に味噌を付けて、從來の信者をも失へる者少からずと、三日午前四時旅館を出て、停車場に向ふ、臺灣守備兵を乗車せしめんが爲に、發車の後、二時間、黒岩長七郎氏送りに白河驛に至る、全地の各宗僧侶十餘輩一行を迎へて、下車して演說會に臨まんことを懇請す、然れども侯爵には豫定の要件ありたる爲、之を辭して遂に歸京す、上野驛着は午後六時頃なりき、今回の周旋家高橋禪龍、及同行の芳川雄悟と袂を分ちしは、此日の朝なりき、又高橋禪龍師が主唱にからる山形菩提敎會は近日大に隆盛に赴くとの事、其趣意書規則及名譽員等は、本號記事幅濶に付次號に於て紹介せむ

眞宗大學移轉開校式

眞宗大學は全く校舍落成を告げたるを以て、去月十三日愈、移轉開校式を擧げたり、當日は風烈しく雨急なるにもかかはらず、馬車、腕車、陸續として驅け來り、參集せし人は四百餘名にあたり、來賓の主なるものは新法主を始め同裏方、近衛公爵、久我侯爵、小笠原子爵、文部大臣代理岡田總務長官、東京府知事代理同書記官、山川大學總長、文學博士井上哲次

郎氏、元良、高田、片山の諸博士、其他各宗の高僧、新聞雜誌記者等にして、颯て式は十一時を以て始まりぬ、式場の正面に佛壇あり、五色の緞子を以て掩ふ、嚴に之を開扉し、一同起立禮拜の後君か代の奏樂ありて、南條博士教育勸語を捧讀し、次に學監清澤滿之氏開校の辭を述べ次に新法主左の告辭を朗讀す

我眞宗大學新築の功既に竣り、本日朝野諸君子の來臨を得て移轉開校の式を擧ぐ、一派教學の面目易そ崩れに過ぎぬ、意は一國の精神の文明は宗教の力に映つて最も多し、而して一國文化の源泉は實に帝都の思想界に在り、故に苟も宗教の力を以て社會の進運を助けむと欲せば、須らく帝都に密運して其思想界の趨向を觀察し、以て一國の大勢を知らざるべからず是我大學移轉の舉ある所以なり本學の議員并に學生、余が微意の在る所を察し、汝々學を積み徳を累れ、宗教家たるの實力を養ふと共に、常に社會の進運を望み、他日世界の精神的文化の發達に向て一道の光明たらむことを期すべし開校に際し一言之れに及ぶ

次に岡田總務長官は文部大臣の祝辭を朗讀せり左の如し

世の缺陥に處して情操を健確にし道念を崇高にして人を以て徑に安心立命の地位を得せしむるもの豈に宗教の功徳にあらずや是れ國の東西を論ぜず時の古今を問はず宗教の社會に存在する所以なり

然りと云へば、宗教も亦其時代の要求に應じて歩運を一にし以て之が改善の途に就かざる可からず是れ宗教家の務哉か今日宗教界に於て一日も緩まずべからざる所以なり本校元々眞宗の學を以て其宗旨の教育機關として遠く寛文年間創設に係り爾來後世の變遷と共に幾多の更革並に新築功竣へ本日移轉開校の盛況を見るるに至れるは實に盛なりと云ふべし庶幾は今日以後道義新猷吹寄りて完全なる宗教家を本校より出し以て我立明三府の光彩を添へしめんことを是れ本官の希望に堪へざる所なり一言開校の盛典を祝し併せて本校の前途益々隆昌ならんことを祈る

明治三十四年十月十三日

文部大臣理學博士 菊地 大藏

次て近衛公爵は一場演說を試みぬ、要は宗教の社會に必要なるとは云ふ迄もなく、之を以て日本道徳の基礎となし、以て遠く海外に迄及ばざんことを望むにありき、千家知事の祝辭は阪本書記官代讀し、次て文科大學長井上博士は徐に演壇にのぼれり、同博士には此日大氣焰を吐くべきよし豫め知れる

を以て、吾等は片唾を吞て視線を博士の一身にあつめぬ、初めより冷評を以て迎へたる人々には、何等の感動を起さざらんも、博士の言ふ所一々肺腑に徹するものあり、左に要旨を摘載せん

(一)佛敎の方針は學術の進歩に伴はざるべからず見角守密に傾く弊あり(二)佛敎は宇宙萬物有神教に傾き寂靜主義に陥るの虞あり動もすれば人格を無視せん(三)故に道徳主義を取ら(四)三願世に傾き獨善に流れ易し現世主義に移ざるべからず(四)四吸取主義即ち寄附金の募集も佛敎の發心専らなるべからず一方博愛慈善の行を爲すこと(五)佛敎の如くす(六)宗教家は専ら心に忠實なるを要す眞に信仰なきものは寧ろ還俗す(七)宗教は精神界に在り堂塔伽藍は之を客觀的に信するのみ(八)僧侶は慈悲忍辱を守り謙遜ならざるべからず然るに自分の下にあるものを頗る卑しめ呼ぶものあり又世間の人を俗人と云ひて輕蔑するは如何世間俗人のみならず僧中堂俗物なからんや(九)又僧侶にあたる者門外漢と呼ぶ佛學上より見れば世間人必ずしも門外漢にあらず印度に於ける西洋人の佛學は大に有益のこゝ多し(九)徒らに外教に對抗するの主義を取らば愚也外教に打勝つには眞の信仰眞の淨行にあるべき(十)二十萬の僧侶社會に何の貢獻もなければ是唯遊民なり大社屋なり

殆ど一時間餘に亘る、容易ならざる大氣焰なりし、式場に女傑奥村五百子あり、此時憤然として「コンナ演說聞く必要はない」クヤン、泥棒官吏々々々々」と連呼しつゝ、式外に出て行きぬ、後にきけば事務員の人々は頗るもてあせしたりと云ふ、最後に島地默雷氏の演說と敎學部長谷了然氏の祝辭ありて清澤學監の謝辭を以て式を了へ來賓一同退出、暫時休憩食堂に於て立食の饗應あり頗る丁重を極む圖書室に新到の西藏藏經を閲覽して、全く散會せしは午後三時過

眞岡總務員の送別會

宗敎法案以來東奔西走一日も寧日なく本會の爲め熱心に盡瘁されたる本會總務員文學士眞岡湛海氏は此度伊勢一身田高

善はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、居間は多量

へず知らず彼の惡主義迄も吸収したのである、然るに今日此點に於て反省自覺して、吾人は競争主義を捨て、和合主義を取らねばならぬと分りた以上は、吾人は決して通義だの輿論だのと云ふことに頓着すべきでない、斷然として和合主義を發揚すべきである。

然るに、通義だの輿論だのに頓着すべきでないといふへば、其が取りも直さず不和合ではないかと云はるゝかも知れんがこゝが正しく和合主義の一特點を發揮すべき所である、和合主義は常に服従主義を忘れざる者でなければならぬ、吾人は前に從順の心に就て少しく開陳したことであるが、今茲に云ふ所の和合の心は常に彼の從順の心を豫定するものである、通義だの輿論だのに頓着すべきでないといふのは、各自が精神的に只和合主義を思ふて、其が通義だの輿論だのに如何なる關係であるといふ様なことを思はなくてよいといふのみである、實際外面に發動する所に於ては、外物他人に對する時は、専ら從順を表して、自由にあり得べき所には自由に行ひ、服従すべき所には快く服従して、競争だの勝敗だのと云ふ念慮を忘却して、只管和合の心に住して行動すべきである、之に就ては一つ此和合の心の根本的成立を自覺する必要がある、和合の心の根本的成立は、外の義ではない、或は四海兄弟といひ、或は萬國同胞と云ふが如き觀念である、其範圍は如何なる程度でもよろしい、必ずしも萬國と限り四海と限るを要としない、空論上にては、其範圍の程度によりて、或は萬國同胞では愛國心と衝突するとか、或は國家同胞主義にては

普遍仁愛と調和せぬとか云ふ様な議論もあらうが、今茲に云ふ所の和合主義は、極めて直接なる實際主義であるから、此の如き空論には毫も頓着するを要しない、然れば、其直接なる實際の様子は如何と云ふに、乃ち茲に吾人が某なる一人に對して和合の心に住するに於ては、吾人と某とが同範圍内に立ち得べき所に其同胞主義を思ふのである、然し某が家族中の一人であれば、吾人は家族同胞の觀念によりて、和合の心に住し、若し某が同郷の一人であれば、吾人は郷黨同胞の觀念によりて、和合の心に住し、若し某が同學の一人であれば、吾人は學海同胞の觀念によりて、和合の心に住し、若し某が同信仰の一人であれば、吾人は信海同胞の觀念によりて、和合の心に住し、如何ある人物に對しても、吾人は直に其人物と吾人とが同範圍内に立ち得べき所に、同胞主義の觀念によりて和合の心に住すべきである、此の如き同胞主義の觀念は、畢竟萬物同體の原理に由來するものにして、其範圍は廣く萬物に及ぶものなりと雖も、其實際は吾人現在の必要に應じて、大小種々の範圍に發現するを見る、而して其指南は種々の人物が吾人の現前に直接し來る所に於て明なるが故に、吾人は常に其現前に直接し來る所の人物に對して、同胞主義の觀念によりて和合の心を修養すればよい、

御 本誌記事編纂に付、字部宮雜感、北京だより、其他讀者諸君の寄稿をかくる能はず、悉く次號に譲る

斷 こと、せり、一言寄稿者諸君に謝す。

○新刊紹介

●續一年有半

東京日本橋區 博文館

前記「一年有半」を著して、江蘇の福澤同僧を惹きたる兆民居士は、今亦「續一年有半」を公せり、きげは居士の病勢は日増に募りゆき、切開したる氣管の呼吸は奄々として、軀體の衰弱は宛然瘦弱の狀を呈しつゝ、ありと云ふ、居士曰く、筆を執らざるも苦し、一筆を執るも苦し、苦しき事には一なりと、其苦痛の劇甚なるに拘らず、一筆にても唯多く書かんと欲す、成れば來りて休む、醒めては筆を執り、所謂苦心慘澹の餘に成りしものは即ち本書なり、本書は著者の云ひし如く、順序を追ひ系統を尋ねて、組織的に論述したるものにあらず、所謂哲學上に於ける中江三三三なるものは明に窺ひ知ることを得、本書論する所主として、神の有無、靈魂の滅小滅、有限無限、無始無終等、紛糾錯雜せる千古未決の問題を捉へ來りて、一刀兩斷立ちこころに釋釋を下し、徹頭徹尾唯物論の筆鋒を以てしたるは大膽なりといふべし、居士乃ち靈魂は斷して無きものとして左の如く説明されたり

精神とは本体ではない、本體より發する作用である、働きて有る、本體は五尺體に有る、此五尺の體の働きが即ち精神である、働かざる作用である、(略)夫れ十三者は十五元素一時の包含する靈敏なる作用である、(略)夫れ減か還元して即ち離離して即ち身死するに於ては之が作用たる精神は同時に消滅せざるを得ざる理である、炭が灰に成り薪が燼すれば炭と灰とは同時に滅ゆると一體に有る、無殺已に離して精神論は在り、は普通の極、苟も宗教に濫用せられざる、自己死後の勝手を割出しさせざる健全なる腦髓には理會されべきでない云々

著者今病臥あり、著者の本體たる五尺體、既に不健全なるを以て其思想も少く不健全なり死後の勝手を割出しさせざる健全なる腦髓も、今はあまり健全なる議論も出てぬ様なり、

尙著者が世界萬有が無始無終なるを説き、進んで釋迦基督が如何なる哲學者であるかを論じたる一節、頗る面白く讀まれたり、左に之を抄せん

釋迦も頗りに主觀説を主張したる後、空觀説を取りて兩造相調和せしめて、始めて眞乘門を打出したる言ても良し

耶穌は此邊の事には何にも言て居ない様だ、夫も其苦、耶穌は一無害の長者、一多情多血の狂信者で、聖靈氏の偉大博學の哲學者では無かつたのである、ルナンの耶穌の傳は眞を得たものたらうと思ふか、一の極て無邪氣の、極て感情に富た人物、云は、男性のシャヤンヌダルクも見る可き有る言て居る、此の如き人物に主觀の客觀の八差數論に固まり待つ可き無し、甚面白きことあり、然れども「續一年有半」に比して興味甚少く居

●法のいわた

小石川區 加特甚界社

十月十五日發行

六波羅密を解釋したる、片たたる小冊子施本用として適切なり

小林正盛述

定價 一冊金五錢 一ヶ年前金 五拾錢



第六號要目

●唯信安樂 主 義

●光明中の生活 主 義

●主婦の心得 主 義

●女の道 主 義

●白薔薇 主 義

●ビスマルクの母 主 義

●歌話斷片 主 義

●降り暗 主 義

●睡眠間の衛生 主 義

●和歌 主 義

●料理のたしなみ 主 義

●文の園 主 義

●唯信安樂 主 義

●光明中の生活 主 義

●主婦の心得 主 義

●女の道 主 義

●白薔薇 主 義

●ビスマルクの母 主 義

●歌話斷片 主 義

●降り暗 主 義

●睡眠間の衛生 主 義

●和歌 主 義

●料理のたしなみ 主 義

●文の園 主 義

發行所 東京日本橋區築地三丁目九十二番地

以文會

善はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は多論利

(〇二)

櫻村 濱口惠璋著

古英雄と宗教

美装 (百六十頁)

實價金貳拾錢 郵税金四錢

題して『古英雄と宗教』と云ふ、古來英雄の士が宗教に對する思想、及び行爲を叙述したるもの五十餘名也、藤原鎌足あり、和氣清盛あり、坂上田村麿あり、菅原道實あり、源義家あり、平重盛あり、北條時頼あり、時宗あり、楠正成あり、新田義貞あり、毛利元就あり、太田道灌あり、大石良雄あり、二宮尊徳あり、山岡鐵舟あり、其他數十名の宗教に對するの思想、及び行爲を録したるなり、以て座右の珍となすべく、以て青年及び軍人への贈物となすべく、布教家は以て新材料を道裡に得べく、之れを讀んで妙味津々英雄と對談するの想あり、之れを携へて修練せば、英雄の域に至る又難きにあらざる也、

横井見明師編纂〇示談の上再版譲受

村上博士講演集

訂正 増補 二版 定價金貳拾五錢〇税金四錢

本書は博士村上專精師が、各所に於て演説せられたる筆記なり、博士が該博なる識と壯快なる辯述とを以て、如何に偉大なる感化を世道人心に興へつゝあるかは、世既に定論あり、而して本集收むる所十有余篇、

佛教の大意、佛教倫理の要旨、佛教無我説に於て、禪と念佛、佛教の過去及將來、歴史上の釋迦佛、宗教と學術との關係、教育と宗教との關係、予が人生觀、廢物利用に就て、人性とは如何なるものか等なり

發行所

東京本郷四丁目 文明堂
 東京堂 服部商店 光融館
 森江書店 北隆館
 地方 京都西六條 興教書院

政教時報發行所

大日本佛教徒同盟會出版部
 (電話番號本局二四三三番)